

論文の和文要旨

論文題目

親疎関係によるポライトネスの日中対照研究
—ディスコースポライトネス理論の観点から—

氏名

李宇霞 (リウカ)

本研究は、敬語を有する言語である日本語とそうでない言語である中国語とのポライトネスを同じ枠組みで比較・検討することによって、Brown&Levinson(1987)のポライトネス理論と宇佐美(1998、2001、2002等)のディスコースポライトネス理論(以下はDP理論と称する)の有効性を実証的に検証するものである。Brown&Levinson(1987)のポライトネス理論に基づくと、P「力関係」とRx「相手にかかる負荷度」が一定の場合、D「社会的距離」(話者の親疎関係を指標とする)を変数とする。つまり、本研究では親疎関係が日本人と中国人の言語行動にどのような影響を与えるのか考察することを研究目的とする。本研究は11章より構成しており、以下に各章の概要を記述する。

第1章では、本研究の理論的な枠組みを紹介し、具体的に①日本人会話のスピーチレベルと中国人会話の語彙の丁寧度②日中の話題導入の仕方③日中のあいづちの使用状況という三つの観点から分析する研究動機と本研究の目的について説明した。

第2章では、宇佐美(2008b)の「総合的会話分析」という実証的な研究方法に基づき、条件統制された日本人と中国人の会話データの収集方法について述べた。本研究は性別、年齢、出身地、力関係を統制した日本人女性ペアの初対面同士と友人同士の会話を12組、中国人ペアは男女6名ずつとし、初対面同士と友人同士の会話を24組、総計36組(合計720時間)のデータを収集した。またデータの妥当性を検討するために会話終了後にフォローアップ・アンケートを行い、会話の自然さなどについて五段階評価で評定してもらった。収集した会話データは宇佐美(2011)「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System For Japanese: BTSJ)」と宇佐美他(2007)の「基本的な文字化の原則(Basic Transcription System For Japanese: BTSJ)の中国語への応用について」に従って文字化した上で分析資料としている。さらに、中国人男性会話データと比較するために、宇佐美まゆみ監修(2013)『BTSJによる日本語会話コーパス(トランスクリプト・音声)2013年版』に収録されている日本人男性会話データから初対面会話と友人会話データを6会話ずつ選出し、今回の分析に使用することとした。

第3章から第6章までは「どのように話すか」に注目し、日本人会話のスピーチレベルと中国人会話の語彙の丁寧度について分析した。第3章では、話者自身の言葉遣いの特徴の指標となっている(宇佐美2001)日本人会話の文中スピーチレベルについて詳述した。日本人初対面会話の文中スピーチレベルの基本状態は特別にマークする必要のない語彙(以下はニュートラルな語彙Pと称する)である(女性は91.30%であり、男性は85.06%である)。日本人友人会話の文中スピーチレベルの丁寧度は初対面より下がるが、ニュートラルな語彙Pは、女性は75.24%であり、男性は56.55%である。特に男性会話は割合が大幅に下がり、丁寧度が低く正式な場面で通常使わない語彙(N)が4割強に達している。しかし半分に達してはいないため、日本人友人同士会話の基本状態は初対面と同じようにニュートラルな語彙Pである。つまり、日本文中スピーチレベルの基本状態は、初対面

と友人同士会話と両方ともニュートラルな語彙Pである。さらに、文中スピーチレベルの各項目を t 検定にかけた結果、親疎関係という社会的距離を顕著に反映しているのはニュートラルな語彙Pの減少と正式な場面で通常使わない語彙Nの増加である。

第4章では対話相手への配慮、心的距離の調節、待遇の指標となる(宇佐美 2001)日本人会話の文末スピーチレベルについて分析した。日本人初対面会話の文末のスピーチレベルの基本状態は「です・ます」体Pである。一方、日本人友人会話の文末のスピーチレベルの基本状態は常体(N)である。さらに、文末スピーチレベルの各項目を t 検定にかけた結果、親疎関係という社会的距離を顕著に反映しているのは「です・ます」体Pの減少と「だ」体Nの増加である。また、友人同士の会話に選択された話題とあわせて考察すると、日本人女性は言語形式である文末スピーチレベルの丁寧度をさげることで親しみを表しているのである。それに対して、日本人男性は彼女の話など親密な話題を選択することによって親しみを表しているという結果となった。

第5章では日本人会話のスピーチレベルシフトについて詳述した。スピーチレベルシフトの観点から日本人会話データをコーディングし集計し、各項目を t 検定にかけた結果、対話者との親疎関係を顕著に反映しているのは、日本人初対面会話と比べると、友人同士の会話のスピーチレベルシフトが有意に少ないということである。言語形式からみれば、日本人初対面会話におけるダウンシフトで一番多いのは「名詞、形容詞、形容動詞、動詞+接続助詞」という形である。一方、日本人友人同士会話におけるアップシフトで一番多いのは「でしょう」という形である。

機能からみれば、日本人女性初対面会話のダウンシフトの中で一番多いのは「感嘆・感動」という機能であり、男性の場合は「中途終了型発話」という機能である。一方、日本人友人同士会話におけるアップシフトの機能で一番多いのは「確認」であり、主に「でしょう」へのアップシフトである。それは自分の意見に賛同してもらいたいという話し手の望みに応えるという B&L(1987)の「一致を求めよ」というポジティブ・ストラテジーになっていると思われる。

第6章では、中国人会話の語彙の丁寧度について詳述した。その結果として中国人初対面会話の語彙の丁寧度の基本状態はニュートラルな語彙Pである。ただし、言語形式においては中国人男性初対面会話は女性よりくだけた言い方が多い傾向がある。一方、中国人女性友人同士の語彙の丁寧度の基本状態はニュートラルな語彙Pである。それに対して、中国人男性友人同士の語彙の丁寧度の基本状態は丁寧度が低く正式な場面で通常使わない語彙Nである。しかも6会話すべてにおいて罵り言葉(NV+V)が出てきた。宇佐美(1998、2001、2002等)のDP理論を用いて分析すると、親の関係である中国人男性友人同士の会話においては罵り言葉は会話相手にとって仲間言葉だと解釈され、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとなっている。言語形式からみれば、罵り言葉は丁寧度が低くて、インポライトネスな要素としてとらえるのが一般的である。その言葉の使用はフェイス侵害度の高い言語行動だと思われる。しかし会話終了後のフォローアップアンケートを調べると、それに対して不愉快だと思うデータは一つもなかったのである。つまり機能からみると、中国人男性友人同士の会話では仲間言葉として使用されており会話相手にとって許容範囲に納まっているために、ニュートラル効果となっている。

さらに、中国人友人会話の話題と合わせて分析した結果、日本人の結果と違って、中国人男性は言語形式の語彙の丁寧度をさげることで親しみを表すのに対して、中国人女性は

彼氏などの親密な話題を選択することによって親しみを表していることがわかった。

第7章から第8章までは「どのような流れで会話を進めるのか」に焦点を当てて考察した。第7章では、日本人と中国人初対面会話における典型的な話題展開パターンについて分析した結果、日本人初対面会話の典型的な話題展開パターンは、あいさつの後、「名前、学部、専攻、学年」という個人情報を交換し、今回の会話協力の経緯を話してから、実質的な会話に入る傾向がある。一方、中国人初対面会話の典型的な話題展開パターンは、あいさつなしで、直接に「学部、学年、専攻、出身」という個人情報を交換し、今回の会話協力の経緯を話してから、実質的な会話に入る傾向がある。日本人会話と違って、あいさつ抜きだけでなく、名前すら聞かずに会話を進めるのが基本状態である。

第8章では話題導入の仕方について詳述した。初対面会話では疑問文で新しい話題を導入する傾向があり、一方、友人同士の会話では平叙文で話題を導入する傾向があるという仮説を立てた。実際の会話データで分析した結果、日本人会話の場合、初対面と友人同士の双方で仮説と同じ結果が観察された。しかし、中国人会話の場合、男性初対面以外は、仮説と異なる結果となっている。話題導入の仕方における親密さの程度からみれば、中国人男性初対面会話 < 中国人男性友人会話 < 中国人女性初対面会話 < 中国人女性友人会話である。

ここまでの分析は話し手を中心として進めてきたが、第9章では、聞き手に注目して、あいづちの使用状況を考察した。具体的に日本人会話と中国人会話のあいづちの頻度を調べた結果、あいづちの基本状態は、両方とも疎の関係にある初対面会話は親の関係にある友人同士の会話より頻度が高いということである。ただし、全体の結果からみれば、日本人のあいづちの導入頻度は中国人より高い傾向がある。特に、初対面において、日本人は中国人よりあいづちの頻度が10%以上高いという結果であった。また、日本人友人会話のあいづちの使用状況は一番高いのが「うん系」であり、二番目が「そう系」であり、三番目が「ああ系」である。一方、中国人友人会話のあいづちの使用状況は一番高いのが「嗯系」であり、次は「対系」「啊系」に集中している。音声的に考えると、日中双方で一番多く使われるあいづちの「うん系」と「嗯系」は発音がほぼ同じである。さらに、「ああ系」と「啊系」の発音もかなり近い。つまり、日本人と中国人は友人会話のあいづちの基本状態では音声的に近いものが使われる傾向がある。

第10章では、研究設問に答える形で、節ごとに①日本人会話のスピーチレベルと中国人会話の語彙の丁寧度②日中の話題導入の仕方③日中のあいづちの使用状況という三つの観点から、親疎関係によるポライトネスの日中対照研究の共通点をまとめた。グローバルな観点からみていくと、中国人でも日本人でも男女問わず、親しくなると語彙の丁寧度が下がり、話題導入やあいづちの頻度が低くなる傾向がある。ローカルな観点からみると、中国人男性友人同士のデータには、罵り言葉の使用が観察されたが、仲間言葉として使用されるため、ニュートラルな発話効果と判断される。

第11章では、本研究と宇佐美（1998、2001、2002等）のDP理論との関連性を述べた上で、今後の研究課題を挙げた。